

続『月下小景』考

—「猎人故事」、「慷慨的王子」について

小島久代

『月下小景』考を執筆したのは本学会報第九号（一九九〇年）である。その後引き継いで九一、九二、九四年と続編を書いたが、また手を付けていなかったのが、今回取り上げる「猎人故事」（獵師の物語）と「慷慨的王子」（気前のいい王子）の二篇である。

「猎人故事」

材源は『法苑珠林』巻八二に引かれる『五分律』^{〔1〕}の仏教説話である。

佛告諸比丘。過去世時。阿練若池水邊有二雁。與一龜共結親友。後時池水涸竭。二雁作是議言。今此池水涸竭。親友必受大苦。議已語龜言。此池水涸竭。汝無濟理。可銜一木。我等各銜一頭。將汝著大水處。銜木之時慎不可語。即便銜之。經過聚落。諸小兒見皆言。雁銜龜去。龜即瞋言。何預汝事。即便失木。墮地而死。爾時世尊因此偈言。夫士之生。斧在口中。所以斫身。由其惡言。應毀反譽。應譽反毀。自受其殃。終無復樂。佛言。龜者調達は也。昔以瞋語致有死苦。今復瞋罵如來墮大地獄。（仏は僧たちに語った。むかし静かな池のほとりに二羽の雁がいて、

一匹の亀と親友になった。後に池の水が涸れ、二羽の雁は、いまこの池の水が涸れると親友はきつと大変な苦境に陥るに違いないと話し合った。そこで（二羽で）相談を終えて亀に言った。この池の水が涸れると、君はどうしようもなくなる。でも君が一本の木を銜えて、我々が夫々一方の端を銜えて、君を広い水のある所に運んであげよう。木を銜えている時には慎んで口を利いてはならないと。そこで木を銜えて、集落の上を飛び過ぎようとすると、子どもたちが見て口々に雁が亀を銜えて行くぞと言った。そこで亀はむっとして、お前たちには何の関係があるのかと言った途端、木から離れ、地に落ちて死んだ。その時世尊は次のような偈を述べた。そもそも人は生まれながらに、斧が口の中にあり、それ故に身を切ることになる。その悪言によって、誇るべきものを褒め、褒めるべきものを誇り、自らその災いを受け、遂に二度と楽しめなくなる、仏は言った。亀は軽はずみであった。むかし怒りのことばから死の苦しみを舐めたものがある。いままた怒り罵れば如来は大地獄に墮ちる）

沈従文はこの材源をどのように改作したかを検証しよう。

先ず、この物語の話し手は獵師であるが、その話の内容は黒衣の男が獵師に語ったものであり、二重の入れ子の枠物語形式を創出している点が、他の物語とは異なる。

さて、核になる話は、材源の「五分律」の「二羽の雁と一匹の亀」の話を敷衍したものであり、大筋は変わらない。沈従文はこの簡単な筋を活かして如何に話を膨らませるかに苦心している。第一に場所についてであるが、獵師がまるで雁と見紛うような首の長い黒衣の男に出会ったのは、頤和園の通称租界と呼ばれている湖堤の蘆原であり、また、黒衣の男が獵師に話を語る場所は、蘆の生い茂る池の辺である。第二に二羽の雁と亀が異種なのに親しくなったのは、水辺に一緒に暮らしていたからであって、彼らは芸術、哲学、社会問題、恋愛問題や日常茶飯事逸話など何でも話題にしたとあるのは、吉野尚政氏が指摘しているように、文学修行時代の胡也頻・丁玲と沈従文の関係を彷彿とさせる。第三に雁と亀にそれぞれその形態から定められる性格と思想を付与している。二羽の雁は翼がありどこへでも自由に空を飛んで行けることから、文明文化は速度によってもたらされるといふ西洋的進歩思想を体现するものとしての肉付けがな

されている。それに対して亀は速度が文明文化を生み出したという考えには大反対で、文明文化は生活の沈澱の中から生み出されるものであるとして、中国の伝統的な老荘思想の体現者として形象されている。雁は翼を持つことで享受している自由と見聞の広さに対して、亀は不器用、狭量、貧相、融通が利かないなどの欠点があるが、決してそれを辛いと思つたことはなく『老子』や『荘子』を讀み「知足不辱」の思想を信奉して満足しているさまを次のように描く。

宁为庙堂文綉之牺牲乎？抑为泥涂曳尾之乌龟乎？（寧ろ廟堂文綉の犠牲となるか、それとも泥塗に尾を曳く烏龜となるか）³⁾

と黙考して、昔の哲人でさえそうであつたのだから、自分はお日様がかんかん照りつける暑い日には湿つた泥の中を這い回つたり、橋の下の涼しいところで遊び、寒い時にはお日様が出ていれば、石の上に這い上つて日向ぼっこをし、お日様が出ていない時には、頭や首を縮めて殻に閉じこもつて休んでいるという、のんびりした生き方を楽しんでゐる。また、どこから飛んできたわからない小石が亀の甲に当たつたりしても

虚舟触舷、飘风堕瓦（虚舟の舷が触れ、飄風が瓦を墮す）⁴⁾

と同じで、腹を立てないという無心の境地を示す。つまり中国の伝統的な老荘思想を抛り所として現状に満足し、現状の保守を図る「知足安分」の思想である。

ところが彼らが共生しているこの池の水が涸れ、ついには火事になるといふ事態が起きた。二羽の雁は亀を見捨てて逃げ出すことはできず、亀を連れて引つ越そうと一計を案じる。つまり亀に木の真ん中を銜えさせ、両端を二羽の雁が銜えて空を飛んで北海公園まで飛んで行くことであつた。計画を実行するに当たり、雁は亀にどんなことがあつても絶対に口を開かないと約束させる。二羽の雁が亀を連れて飛んでいる空を見上げて、子どもたちは口々に「やーい、雁の引つ越しだーい、亀の嫁入りだーい」と囃し立てた。亀は「女子どもの口には戸が立てられぬ」とばかり、無視していたが、城中に入つて北海公園の近くまで飛んで来た時に、身なりのきちんとした生徒たちからも囃し立てられると、ついに腹を立て、「お前たちの先生は何を教えているのだ。引つ越しや嫁入りは当たり前のこと

じゃないか、お前ら子どもたちが大騒ぎする程のことか」と口を開いた途端、墜落してしまつた。

ここまでの内容を材源と比べてみれば、筋はほぼ同じであることがわかる。問題は終わりの部分で、材源では、教訓としては亀が軽はずみであつたこと、「口は禍のもと」を教え諭す説話として完結しているのに対し、「猎人故事」では、核になる話をする黒衣の男と、その話の聞き手でもあり、更に話し手にもなる獵師を付け加える。謎めいた黒衣の男が上述の話をし終えたとき、獵師は思わず、「それからどうなつた？」と聞いてしまう。すると黒衣の男は、話の途中で口を挟まないという約束を破つたと腹を立て、タバコに火をつけると、蘆の繁みの方へさっさと立ち去つてしまつた。その後ろ姿はまるで雁のようであつた。獵師は亀が落ちてからどうなつたか、続きを聞きたいと思ひ、それから十六年間ずつと言葉を話せる雁を探し続けているのである。

蘇雪林はこの物語で作者がなにを伝えようとしたのかは不明としているが、筆者は「知足安分」、「知足不辱」の老荘思想に依拠するのみで自分の運命を切り開くことができない者を亀の形象に託して戯画化して描いた作品だと考える。沈從文はその一年後には『辺城』を書き上げる。

『辺城』の祖父は孫娘の翠翠を幸せにしてくれる若者に手渡したいと願うが、翠翠が次第に死んだ母親にそっくりになつて来たのを見て、同じ運命を辿ることを怖れる。その心境を「彼女はかの兵士と知り合つてしまつたのだ。最後には老人と赤ん坊を残して、その兵士の後を追つて死んだのである。こうしたことは老船頭に言わせると誰の罪でもない。ただ天が責任を負うべきであつた。翠翠の祖父は口では天を恨まないし、人をとがめないというが、心のかではこのような不幸な運命を完全に受け入れることはできなかった。結局はやはり若い者のように、口では諦めたよと言つても、諦めきれずどうしようもなく容認できぬことであつた。そして彼自身に割り当てられた負担分は、まさに不公平なことであつたのだ」と述べている。

沈從文の実生涯では、時には亀のように首を甲羅のなかに縮めて荒れ狂う理不尽な狂風から身を守らなければならぬという状況におかれた時には、老荘思想に韜晦してやり過ごしている場面も見られる。「猎人故事」では、老荘

思想を信奉している亀の不幸を描くだけに留まっているが、それに疑問を感じているのが『辺城』の祖父の形象であるとは言えないだろうか。

「慷慨的王子」

材源は『法苑珠林』卷第八〇に引かれる「佛説太子須大拿經」⁸⁾である。材源に登場する人物・動物は、国王濕波、二萬人の夫人、太子須大拿、王妃曼坻、白象須檀延、婆羅門八人、婆羅門、忉利帝釈（檀特山の城郭に化ける）、阿州陀と言う名の道士（五百歳）、耶利、鬪拿延、禽獸、拘留国の貧しく醜い婆羅門とその妻、獵師、天王帝釈（獅子、十二の醜さを持つ婆羅門に化ける）。材源となる仏教説話は長文のため全文引用は省く。

この物語も核となるあらずじのほとんどが材源の仏教説話Aの現代語訳Bであるが、他の物語と同様、核となる仏教説話Aを膨らませている。一例を挙げると、冒頭の部分のAは、Bのようにデフォルメされている。

A：其王号曰濕波。王有二萬夫人。了無有子。王自禱祠諸神天人。便覺有娠。至滿十月太子便生。字爲須大拏。

B：国中有个大王、名叫濕波。这个王年轻时节、各处打仗、不知休息、用武力把一切附属部落降伏以后、就在全国中心大都城住下、安富尊荣、打发日子。这国王年纪五十岁时、还无太子、因此按照东方民族作国王的风气、讨取民间女子两万、作为夫人。可是这国王虽有两万年青夫人、依然没有儿子、这事古怪。叶波国王同其他地面上国王一样、聪明智慧、全部用到政务方面以后、处置自己私人事情、照例就见得不是很高明。虽知道保境息民、抚育万类、可不知道用何聪明方法、就可得一儿子。本国太医进奉种种药方、服用皆无效验。自以为本人既是天子、一切由天作主、故到后这国王听人说及本国某处高山、有一天神、正直聪明、与人祸福灵应不爽时、就带了一千御林军、用七匹白色公鹿、牵引七辆花车、车中载有最美夫人七位、同往神庙求愿。国王没有儿子、事不奇希、由于身住宫中、不常外出、气血不畅、当然无子。今既出门一跑、晒晒太阳、换换空气、筋骨劳动、脉络舒张。神庙停驾七天以后、七个夫人之中、就有一个怀了身孕。这夫人到十个月后、产生一个太子、名须大拿。

上記の例から明らかなように、BはAの十倍の字数に引き伸ばされていることが分かるだろう。また、国王の名前は濕波↓温波、須大拏↓須大拿などの変更があるが省略する。Aにはなく、Bに加えられた人物として、白い顔の女髻の薄い男、物語の語り手として宝石商人、物語の聞き手としては、宿泊客の他に瘦せた田舎者、旅籠宿（金狼酒店）の主人を付け加えている。

「慷慨的王子」の物語は一人の宝石商人が語ったものである。核となる物語は次のようである。

葉波国の国王は五十歳になるが、まだ子がいなかった。そこで二万人の若い女性を夫人にしたが、それでも子宝に恵まれなかった。そこで天神が在す神廟に千人の近衛兵、七匹の白い鹿に七人の美しい夫人を乗せた七輦の花車を曳かせて参詣し、廟に七日間滞在したら、一人の夫人が懐妊した。十月経って生まれた子は須大拿と名付けられた。須大拿は十六歳で嫁を娶った。金髮曼坻という。曼坻はのちに一男一女をもうけた。耶利と脂拿延である。須大拿は宮中の生活に飽きて、ある日平民の服を着て、街へ出た。わずか一日で貧しい人、身体障碍者、疥癬や瘰癧もち、老衰者、死人などを見て心がふさいだ。宮殿に戻ると国王に蔵の中の宝物を臣民に施したいと願ひ出る。国王から蔵の鍵をもらい、早速宝物を取り出して三日間施しをして臣民の欲望を満足させる。この気前のいい太子の話は敵国にも知れ渡る。敵国の王は葉波王が大事にしている蓮の花の上を歩ける象（須檀延）を手に入れたと思う。八人の家来が夫々自らの片足を鉄の錘で碎き跛になつて太子に白い象を求めてやつてくる。須大拿は父王の大切な象だからと断るが、再三の要望と一律平等に私心なく布施をするという志に反すると考えて、父王から罰せられることを覚悟で遂に白い象を八人に与える。父王は太子を罰して十二年間檀特山に放逐する。須大拿は妻子を伴い山へ馬車で向かうが、途中で出会つた者たちの欲するままに馬も車も自分や妻子の着ている衣服まで、求められるものを悉く布施してしまう。檀特山に入つてから動物たちと楽しく暮らしていたが、ある日拘留国の退役軍人が妻の召使にするために須大拿の二人の子どもを欲しいとやつて来ると、妻の曼坻が留守の間に子どもたちを退役軍人に連れて行かせる。曼坻はそれを知つて地を駆けまわり泣き叫ぶが須大拿に諭されて服する。ある大神が須大拿を試そうと醜い老人に変身し

て須大拿に曼珉を自分の妻に欲しいと求めると、須大拿はその願いも聞き入れて曼珉を老人に渡す。老人は須大拿の布施の志を試しただけだと言い、その徹底さに感心して曼珉を須大拿に返す。また、曼珉の三つの願いを叶え、子どもたちは葉波国に売られ、国王は孫たちの姿を見て、自分の非を悟り、太子を許して自分の非を謝り、太子はめでたく帰国し、国王は蔵の鍵を太子に与え、以後隠居した。太子は以前にもまして恣に布施をした。物語はそこで終わる。材源では須大拿は仏自身などの説明があるが、沈従文はその部分を省き、瘦せた田舎者を登場させて、物語の後に起きた拍手に対して不満を表し、次のように言わせている。

「皆さん、お静かに、私の話をお聞きください。葉波国王の太子は大層気が良く、珍しい宝物を布施しました。これまでそんなに気前のいい人はいなかったのですから、確かに立派です。しかし皆さんのこの物語に対して与えた拍手から見ると、皆さんの行為は、まるでその王子と競う積りのようですが、違うのは、一方は珍しい宝物で一方は拍手に過ぎないことです。私の意見では、この物語はあの旦那が古めかしい文章で述べたのですから、我々は誰もが立ち上がって大声で「いい話だった!」とお礼を言えは充分なのです。このような拍手をするのは構いませんが、拍手が長すぎると、もし別の敵国や仇が慈悲を請いにやって来たら、皆さんは拍手の他に、なにを与えるのですか?」

と。さらに次のような科白も付け加える。

「皆さん、皆さんは王子の行為を賛美し、王子の自己犠牲は、人格が高尚でとても及ぶべくもないとお思いでしょうね。いま山の虎が腹を空かせて食べ物を求めています、どなたか掌を切り落として、山谷の虎に食わせることができますか?」

と言うと、微笑を残して暗闇の中に姿を消したと描いている。宿泊人たちは出て行った田舎者が本当に自分の体を虎に食わせるために犠牲になろうとしていると騒ぎ、助けに行かなくてはと言う者もいるが、誰一人として外へ出て行く勇氣のある者はいなかった。また、宝石商人が自分の話に感心し、自分の体を捨てて虎に食わせようという田舎者

が出たことに満足し、他にも二人感動した者がいるとホラ話をしようしたら、宿の主人が先ほど暗闇に出て行ったのは有名な獵師だと告げる。宝石商人は嘘がばれて、寝たふりをして自分の刺繍をしたスリッパを焚火で焦がして犠牲にしてしまったという落ちを付けている。

材源では、太子のように自分の宝物を惜しげなく与える行為は、仏に近づく道だとして賞賛しているが、沈従文が「慷慨的王子」で述べたことは何なのだろうか？

吉野尚政は「瘦せた田舎者」の「乡下人」を、沈従文の分身と考えていいだろうとして、「慷慨的王子」は、何かをしてもらうことを望むだけで、自分では何もしいない人たちや、称賛だけして、人のために何かしろと他人に勧めるような人たちを風刺する意味を持つ作品であると考える」と述べている（注2と同じ）。筆者も「乡下人」は沈従文の分身だと考える。それ故に、沈従文が最後に「乡下人」を登場させた意味にこだわりたいと思う。つまり、

仏ではない人間に、王子のように自分の愛する子どもや妻でさえも、欲しがる人には惜しげもなく与えてしまうような行為ができるだろうか、そしてそういった無私の布施を現代でも生かすべきだと考えてこの物語を現代語に訳したのだろうか。また、吉野の述べるように、物語を聞いて称賛するだけで自分では何もしない人や、他人に何かしろと勧めるだけの人を風刺するためにだけ「乡下人」を登場させて上記のような皮肉を言わせているのだろうか。繰り返しになるが、筆者はこの「乡下人」はもともと根源的な問いを発しているのだと思う。つまりそのような行為は果たして人間にできることなのかを問うているのである。それ故に、畳みかけるように「虎に自分の掌を切り落として食わせてやることができるか？」と問うているのである。仏教説話では、私心なく布施をする仏の行為を称揚する話として語られたものを、沈従文はそっくりそのまま清末以降の中国、とりわけ東北三省（一九三一年九月一八日に起きた満州事変後日本の植民地とされた満州）を帝国主義列強によって次々に奪い取られた現実を脳裏に浮かべて、そうした事態を招いた政権当局者に対する諷諫を込めた作品として読者に提示しているのだと考えたい。

沈従文は文学が政治に従属することに反対し、むしろ文学が政治を指導すべきだと考えていた。親友の胡也頻と丁

玲は急速に共產主義に近づき左翼作家連盟に加入したが、沈從文は彼らとは距離をおき、権力には近づかないようにして、作家は作品によってのみ立つべきだと主張した^①。また、一九四六年以後、国共内戦に反対したことから、政治がわからない作家と見られる傾向がある。しかし彼は五四の精神を受け継いで文学救国の理想を終生持ち続け、また、抗日戦争を支持した熱心な愛国主義者であったことは次の文章からも読み取れる。同時期に発表された「打头文学」（頭を殴る文学^①）を見てみよう。冒頭

中国は五四文学革命以来、ロシアの小説については、終始最もよい友情を抱いて親しんできたとして、作家と読者のいずれもロシアの小説から大きな影響を受けているのだが、近年そのことがあまり取り立てて言及されなくなつたことに不満を示している。というのは

ロシア文学には明らかな特徴があり、それは作品に老人と若者、新旧の衝突が描かれていることである。衝突の問題は政治観念や生活態度の違いに外ならないが、それを解決する方法も沢山あるが、「打头」（頭を殴る）が非常にわかりやすい方法である。いわゆる頭を殴るとは、若者が、誰かが嘘をついて、その嘘が若い世代の全ての発展に不利になることがわかると、さあ来い……、相応のやり方で……ということに相成るのであるとして、一つの寓話を紹介している。

一人の愚か者があり、つる禿だつた。ある者が彼の頭を目がけて硬い梨を投げつけた。何度も繰り返し梨が当たつて頭は負傷したが、愚か者は黙つたままそれを耐え忍び、仕返しもしなかつた。ある人が彼に負傷したのに、どうして投げつけられた梨を避けもせず、やられた理由を追及しようともしないのだと問うたのに対して、愚か者は「あいつは力を恃んで、知識もないのに、考えなしにでたらめをやり、やりたい放題やり、梨で私の頭に傷を負わせた。私の頭は負傷したが、あいつは自分がどれほど損をしたか理解していないし、わかりもしないのだ」と言つたという小咄から、現在の中国では人に殴られても、つる禿げが殴られた後のような態度をとる者がたくさんいる。

として、例えば中国が東北三省を失った後に発表された意見を同文の中で紹介する。

中国は侮られて確かに損をした。だが将来損をするのは決して中国人ではない。中国は広い土地を失い、失地はすぐには奪い返せないが、それも中国の致命傷ではない。それはただ日本人の愚かさに過ぎない。何故なら日本が併呑したのは東北三省ではなくて、実は一つの爆弾に過ぎないからだ。この爆弾はある日破裂するはずだ（誰の発言かは未詳：筆者）

こういった意見に対して、沈従文は爆弾はいつ破裂するのか、どのように破裂するのかについては説明していないではないかと非難し、

こういったあたかも人に頭を殴られたかのようなふりをして平民に嘘をつき、国民に麻酔をかけて自分の無能ぶりを覆い隠そうとするような大物や、一知半解の知識でこうした嘘つきの犯罪を助ける者には、実はロシアのある時期の文学が描いて見せたところの本当に頭を殴る方法で、彼らを懲らしめる以外は、この民族に対して自分が如何なる損害を与えたか、それゆえどのような待遇を受けるのが相応しいのかをわからせる、より良い方法はないのである。……この時代の文学は、若干の人は殴られる必要があることを示し、及びこれらの人にどのように殴るかを示すべきなのは、極めて明らかである！

と述べている。

「打头文学」は、満州事変後も日本の侵略を座視し続ける国民党政権の無為無策ぶりに対する憤りを示しているし、また、そうした無能な国民党政権の無策を批判するのが文学の役割だと述べている。国民党政府から委嘱された楊振声の主導する国定教科書の編集作業にも係っていた沈従文^①の微妙な立場からの発言ではあるが、彼が自国の領土（東北三省）を奪われたことに決して無関心ではなく、輻晦を決め込む為政者の頭を殴って喝を入れるのが文学の役目だと主張しているのである。

沈従文の家系は軍属に連なる者が多かった。祖父の沈宏富^②、父の沈宗嗣^③はじめ、弟の沈岳奎^④は一九三七年後、嘉善、

九江、長沙における三度の抗日戦を率いた筋金入りの軍人であった。沈從文自身は軍閥の軍隊に嫌気がさして、武を捨て文に就いたが、苗族の出自を自覚して、支配者である漢族に対する鬱屈した感情を抱き、「城市人」に対してあくまでも「乡下人」という立場に固執しながらも、眼前のより大きな外敵である日本軍の侵略行為に対しては、内なる矛盾は抑止して、苗・漢などを含めた多民族からなる「中華民族」をその一員として守らねばならないという感情が生じるのは当然の成り行きだったと考えられる。

「慷慨的王子」執筆は三三年一月、「打头文学」掲載は同年十一月一日という執筆時の近さから考えても、「慷慨的王子」は決して犠牲、博愛の精神を称賛しているのではなく、気前のいい王子を清朝末期から現在の東北三省失地に至るまでの被侵略・被植民地化を招いた為政者の無為無策の姿を諷諫を込めて形象したものではないかと思われる。沈從文の短編小説はしばしば最後の部分でクイックターン（どんでん返し）が見られる。例えば「夜」、「三个男子和一个女人」、「静」などが挙げられる（注16）。この「慷慨的王子」も例外ではない。だが、管見の限り、それを指摘した論文は見られないので、敢えて一石を投じる次第である。

本稿は二〇一六年六月一八日の「青島研究会」で発表した話に手を加えたものである。

注

- (1) 『大正新修大蔵経』第五三冊八九五A所収。
- (2) 吉野尚政『月下小景』について—仏教説話改作から見えること—『湘西』第二号 二〇〇〇年所収。
- (3) 『莊子』の原文は「王巾笥而蔵廟堂之上。此龜者寧其死爲留骨而貴乎、寧其生而曳尾於塗中乎」（王巾笥して之を廟堂の上に蔵す。この龜なる者は、寧ろ其れ死して骨を留めて貴ばれんか、寧ろ其れ生きて尾を塗中に曳かんか）である。
- (4) この部分の「獵人故事」の原文は「虚舟触舷、飘风堕瓦、一切出于无心、都不应当生气、故不生气」（空船が舷に触れ、風が起きて瓦を落したりすることは、無心から出たものであるから、腹を立てるべきではない、それ故腹を立てないのだ）

である。出典は『莊子』の、「山木」の「方舟而濟於河、有虚舟、来觸舷、雖有偏心之人不怒」と、「達生」の「雖有伎心者不怨飄瓦」の二つを自在に組み合わせて表現している。

(5) 蘇雪林『沈從文論』『文学』第三卷第三期一九三四年九月

(6) 原文は、「她认识了那个兵。到末了丢开老的和小的，却陪了那个兵死了。这些事从老船头说来谁也无罪过，只应天去负责。翠翠的祖父口中不怨天，不尤人，心中却不能完全同意这种不幸的安排。到底还像年青人，说是放下了，也正是不能放下的莫可奈何容忍到的一件事。摊派到本身的一份，说来实在不公平！」百花洲文庫『边城』（一九八〇年江西人民出版社）に拠った。訳文は、『辺境から訪れる愛の物語』二〇一三年勉誠出版による。

(7) 一九七一年古稀を迎えた沈從文が半生を述懐した「拟詠怀诗」の中でも、やはり「虚舟触舷急、回飏坠瓦频」と表現しているのを見ると、『莊子』を浮き沈みの激しかった人生をやり過ぎす時の拠り所としていたことが分かる。詳しくは(6)の拙訳書解説を参照されたい。

(8) 『大正新修大藏経』第五十三册八七九B—八八二B所収。

(9) 『记丁玲』续集に、「若把文学附属于经济条件与政治环境之下、而为其控制、则转动时代的为经济组织与政治组织、文学无分、不必再言文学。若否认文学受两者控制、文学实有其独创性与独立价值、然则文学论者所持论、仍无助于好作品的产生。不问左右、解决这问题还是作品。」（もしも文学が経済条件と政治環境に從属させられ、コントロールされるなら、轉變する時代の経済組織と政治組織のため文学は分が^ぶなく、もはや文学を語る必要はない。もし文学が両者にコントロールされることを否認するなら、文学は（初めて）真に独创性と独立した価値を持つのだ。しかしながら文学論者（文学評論家や文学理論家を指す：筆者）の主張はよい作品を生み出すのにはやはり助けとはならない。左右を問わず、この問題を解決するのはやはり作品なのである。『沈從文全集』第一三卷 二〇七ページ）

(10) 「从现实学习」では、次のように述べている。「国家所遭遇的困难虽有多端、而追求现实、迷信现实、依赖现实所作的政治空气和倾向、却应该负较多责任。当前国家不祥的局势、亦即由此而形成、而延长、而扩大。谁都明知如此下去无以善后、

却依然毫无真正转机可望、坐使国力作广泛消耗、作成民族自杀的悲剧。」(国が遭遇している困難は多様である。しかるに現実を追求し、現実を迷信し、現実に依存して作られた政治的空氣と傾向がより多くの責任を負うべきである。当面の(この)国の不幸な有様もそれによって形成され、しかも延長され、拡大されている。このままで善後策が講じられないなら、相変わらず眞の転機は望むべくもなく、座して国力を広範囲に消耗させて、民族自殺の悲劇を作り出すことになるのを誰もがはつきり知っている)、『沈从文全集』第三卷三九二ページ)

(11) 一九三三年一月一日 天津『大公報・文藝副刊』に掲載された。また、日本の敗戦後一九四六年に発表された「一種新的文学観」では、新文学の果たすべき役割として次のように述べている。「高尚原則の再造 既无可望于当前思想家、原則的善为运用、又无可望于当前的政治家、一个文学作家若能将工作奠基于对这种原則的理解以及综合、实际人性人生知識的运用、能用文学作品作为说明、即可供给这些指导者一种最好参考、或重造一些原則、且可作后来指导者的指导。新的经典之所以为经典、即从这种工作任务的重新认识、与工作态度的明确、以及对于「習慣」的否定而定。从这个认识下产生的优秀作品、比普通公务员或宣传家所能成就的功、自然来得长久得多、也坚实得多！」(高尚な原則の作り直しがいまの思想家に望めず、原則をじょうずに運用することもいまの政治家に望めないとするれば、一人の作家がこの原則に対する理解と総合に基づいて仕事をして、実際の人間性や人生知識の運用を、文学作品を用いて説明できるなら、これらの指導者に最もよい参考として提供することができ、或いは一部の原則を作り直すことができ、そのうえ後の指導者を指導することもできる。新しい經典の經典たる所以は、こういった仕事の任務の再認識と仕事をする態度の明確さ及び「習慣」に対する否定によつて決まる。この認識の下で生み出された優秀な作品は、普通の公務員あるいは宣伝家がなし遂げる功績よりも、ずっと長続きするし、ずっと堅実でもある)。初出は『文潮』月刊第一卷第五期一九四六年九月一日(『沈从文全集』第七卷一七二ページ所収)。なお、ここで「習慣」とは、「因習的な文学観」で「文学は政治と不可分であり、その上政治に属する副産物あるいは飾り物である」という考え方を指している。同文一六七ページ参考。

(12) 教科書編纂については、今泉秀人「作家たちの編んだ国語教科書(1)」―(11)『中国文芸研究会会報』三九三号

四一八号二〇一四年七月二七日〜二〇一六年八月二九日連載に詳しい。

(13) 曾國藩率いる湘軍の軍人で貴州提督まで務め、清史稿に名を残している。

(14) やはり曾國藩率いる湘軍の軍人で、一九〇〇年天津大沽で八万国連合軍と戦った羅榮光提督の副將を務めた。また袁世凱暗殺団にも加わり、お尋ね者になった熱血漢であった。

(15) 黄埔軍官学校出で、一九三七年十一月には浙江省嘉善で抗日戦を指揮し負傷、一九三八年九江の戦役でも負傷。三七年から八年の抗日戦では鎮江地方出身の兵士を率いて数十回勇猛果敢に戦っている。一九四八年には国民党国防部少將監察官に昇進している。国共内戦が始まると、内戦に反対して官を辞し湖南に帰郷する途上陳明仁將軍に会い、湘西王と称された陳渠珍率いる起義に参加するよう勧められる。沈岳奎は鳳凰に帰り、陳渠珍に協力して起義に積極的に参画し、鳳凰は平和裏に解放された。だが、五〇年代に沈岳奎は反革命分子として誤って捕らえられ非業の死を遂げている。

一九七八年第一期三中全会で漸く名誉回復された。沈從文「一个传奇的本事」(一九四七年三月二三日『大公報・星期文藝』、『沈從文全集』第二卷所収)では、「淞滬之戰展开、有个一二八師属于第四路指揮劉建緒調度节制、奉命守嘉善唯一那道国防綫、即当时所謂“中国兴登保防綫”。当时报載、战事过于激烈、守军来不及和参謀部联络人員接头、打开那些鋼骨水泥的門、即加入战斗、还以为不可信。后来方知道那師接防的部队、开入国防綫后、除了从县长手中得到一大串编号的钥匙、什么图形也没有。临到天明快要有敌机来轰炸、敌人先头探索部队发现已发生接触时、一个少年军官方从一道河边发现工事的位置、一面用一营人向前作突击反攻、一方面来得及把上锈的铁门次第打开、准备死守。八天的固守、全师大部牺牲于敌人优势日夜不断炮火中、下级干部几乎全体完事、团营长正副半死半伤、提了那串钥匙去开工事铁门的、原来就是我一个弟弟、而死去的全是那小小城中长大的年青人。」(淞滬戰が始まり、第四路軍に所属する一二八師團長劉建緒の指揮の下、命令を奉じて嘉善の唯一の国防線即ち当時の所謂「中国興登堡防衛線」の守備に当たった。戦闘は熾烈を極め、守備軍は参謀本部の伝令と連絡をとり鉄筋コンクリートの扉を開ける暇もなく、戦闘に加わることになるとは信じられぬことであつたと当時の新聞は報じている。防衛を引き継いだその師団部隊は、国防線に加わつてからも、通し番号付きの鍵の大束を

県長から手渡された他には、凶面の一枚もないことが後になってやっとわかった。夜が明けて敵機の爆撃が始まる直前に、敵の先頭探索部隊にすでに交戦開始の気配を気づかれた正にその時、ある若い将校が川沿いに塹壕の位置を発見して、一大隊を突撃反攻に向かわせる一方、錆び付いた鉄扉を順に開錠して死守に備えるの間に合った。八日間守り抜き、一個師団全体は優勢な敵軍の日夜絶え間ない砲火の下で、下級幹部はほとんど戦死し、連隊・大隊の長・副官の半数が戦死、半数が負傷したが、その鍵の大束を引つ提げて塹壕の鉄扉を開錠したのは私の弟であり、戦死した全員がああ小さな村で育った若者たちであった」と、控え目であるが弟沈岳荃の活躍を述べているし、弟を主人公にした小説に『動静』（執筆は一九四三年一月八日『文聚』第二巻第一期、『沈从文全集』第一〇巻所収）がある。また、向成国著『回归自然与追寻历史』（一九九七年 湖南师范大学出版）にも、沈岳荃の参戦した戦いについては詳述されている。

近年沈從文の次男沈虎雛は「沈从文的从武朋友」『新文学資料』二〇一二年第一期に、帰郷後の沈岳荃の最期について次のように記述している。「一九五〇年陳渠珍旧部龙云飞在凤凰发动暴乱，被解放军剿灭后，一二月凤凰常备队被解放军包围缴械，改编，指挥部军官失去自由，集中学习，大张旗鼓镇压反革命运动也在全国展开。毛泽东主席一九五一年一月十七日曾对湘西的镇反作过指示——在湘西二十个县中杀了一批匪首，恶霸，特务，准备在今年由地方再杀一批。我以为这个处置是很必要的。只有如此，才能使敌焰下降，民气大伸。如果我们优柔寡断，姑息养奸，则将遗祸人民，脱离群众。沈岳荃被划入“再杀一批”中，一九五一年一月二十八日判处死刑。三二年后平反，重新承认为起义人员。」（一九五〇年陳渠珍の部下の龍雲飛が鳳凰で暴動を起こしたが、解放军に包囲され武装解除され改編された。指揮部の将校は自由を奪われ、集中的に（思想改造の―筆者）学習させられ、反革命鎮圧運動も鳴り物入りで全国で展開された。毛沢東主席は一九五一年一月一七日に湘西の反革命鎮圧運動について次のような指示をした。（湘西二〇県では一群の匪賊の頭、悪党の親玉、スパイを殺したが、今年地方政府はもう一群殺す準備をしている。私はこの処置はとても必要だと考える。こうしてこそ、敵方の気焰を下げさせて、人民の気持ちを伸び伸ばとさせることができるのだ。もし我々が優柔不断で、扱いが手ぬるく悪人をはびこらせるなら、人民に禍根を残し、人民大衆から遊離することになる）と。沈岳荃は「もう一群殺す」の中に

入れられ、一九五一年一月二八日に死刑の判決が下された。家族には知らされず、どこに埋葬されたかも誰も分らない。三二年後に名誉回復され、起義の人員であったことが再確認された。」と記している。沈虎雛によれば、沈岳荃の死については長兄沈雲麓から沈従文宛ての手紙に暗示されていただけで、真相は知る由もなく、沈従文は弟の死について一言も語らなかつたという。家族もまた沈従文の心情を慮って何も問わなかつたという。沈岳荃の遺児である沈朝慧は沈従文が自分の娘として引き取って育てた。

(16) 津守陽「沈従文のフェティシズム―髪のエクリチュールと身体化される〈都市／郷土〉」『中国文学報』第八十七冊 二〇一六年四月 もこの点についてより深く考察している。